

たろうの日記

川田 進 / 作 かみや しん / 画



たろうの日記

創作こどもらいぶらり11

1976年 8 月／発行◎

著者／川田 進

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社**金の星社**

東京都台東区小島 1 丁目 4 - 3
電話／東京03-861-1506(代表)
振替／東京0-64678

写植／松竹写植

製版／株式会社ユニプロ

印刷／熊谷印刷株式会社

製本／株式会社小林製本所

乱丁落丁本はおとりかいたしますので、お
求めの書店または本社へお申し出願います。

913 川 田 進
たろうの日記

金の星社／ 1976
75P 22cm

基本カード記載例

8393-033111-1406

にろうの日記

川田 進／作 かみや しん／画





三日ぼうずじゃないぞ

ぼくだってできるんだ

あとながき

74

71

63



もくじ

がんばれたって ぼくにはむりさ

8

おねえちゃんの記事

10

かぼちゃあたまは からっぽ

16

じてんしゃが ほしい

19

しゅくだいはまだ 夏休みはすぐおわり

27

しまった みつかっちゃった

36

かっこわるくて かけないや

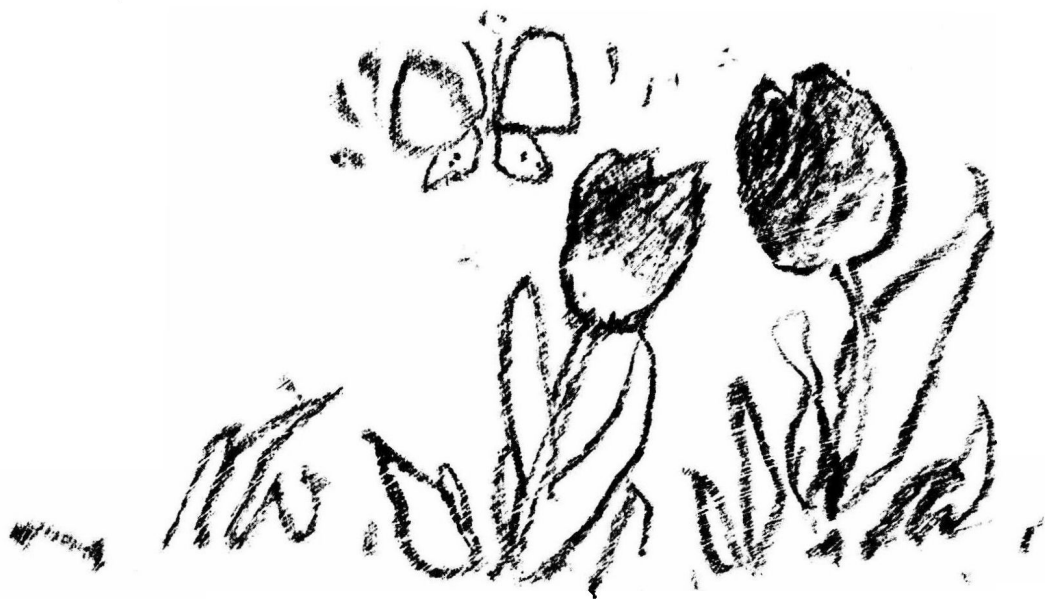
47

きょうから 二がつき

51

五ページじゃ ちょっと少なかったかな

56







■著者紹介



川 田 進
かわ だ すすむ

一九三〇年、山形県に生まれる。山形大学教育学部卒。「日本童話会」「宇宙部落」等で童話を学ぶ。作品には、毎日新聞第21回児童小説入選作「飼育園の仲間」などがある。現在、東京都公立学校教員。宇宙部落同人。日本児童文芸家協会々員。現住所・埼玉県浦和市本太五―三六―八

■画家紹介



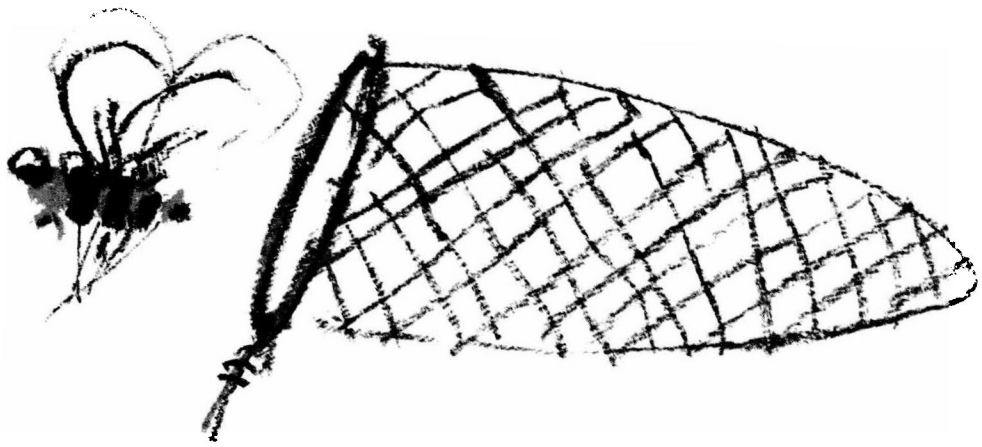
上 矢 津
かみ や しみ

一九四二年、東京に生まれる。一九七〇年、第五回ジヤパン・アート・フェスティバル受賞。七二年、第八回東京国際版画ビエンナーレ鎌倉近代美術館受賞。七三年、第十回リュブリアナ国際版画ビエンナーレザグレアカデミア賞受賞。七三年、カルフォルニアカレッジアートクラフト受賞。児童書の商品多数。現住所・千葉県千葉市長作一五〇八花見川ライオンズプラザ二二―一〇二

たろうの日記

川田進・作
かみやしん・画





がんばれったって ぼくにはむりさ

夏休み^{なつやすみ}まえに、ぼくは「よい子のくしゅう」という ざっしをかった。そしたら、夏休みの日^ひ 記^きちようが、ふろくについていた。

ぼくは作文^{きぎぶん}がすきでない。だから、日記^{にじ}ちようのふろくなんか、さっぱりうれしくなかった。だいいち、ひらいてみても、

(月 日 よう日・天気)

と、あるだけで、あとはなにもかいていない。ただ、たてせんがひいてあるだけだもの。

ぼくは、日記^{にじ}ちようを、つくえのひきだしの中に おしこんだままにしておいた。

おねえちゃん、ぼくとは ずいぶんちがう。作文^{きぎぶん}がとてもすきらしいんだ。

はん月^{げつ}まえ、しんぶん^{しんぶん}に作文^{きぎぶん}をだしたら、にゅうせんしたんだ。

夕^{ゆふ}がた、おかあさんが、かいしゃから帰^{かえ}ってく

ると、げんかんまでとびだして行つて、

「おかあさん、作文がしんぶん^ににゆうせんしたのよ。これ、ごほうびなの。」
と、ぎんいろのメダルを見せた。

「そう、よかったわね。」

おかあさんは、にこにこえがおで　ほうびを見ていたが、ぼくのほうをむいて、

「たろう、あんたも、広子^{ひろこ}ねえちゃんのようにがんばらなくちゃ。」

と、いった。

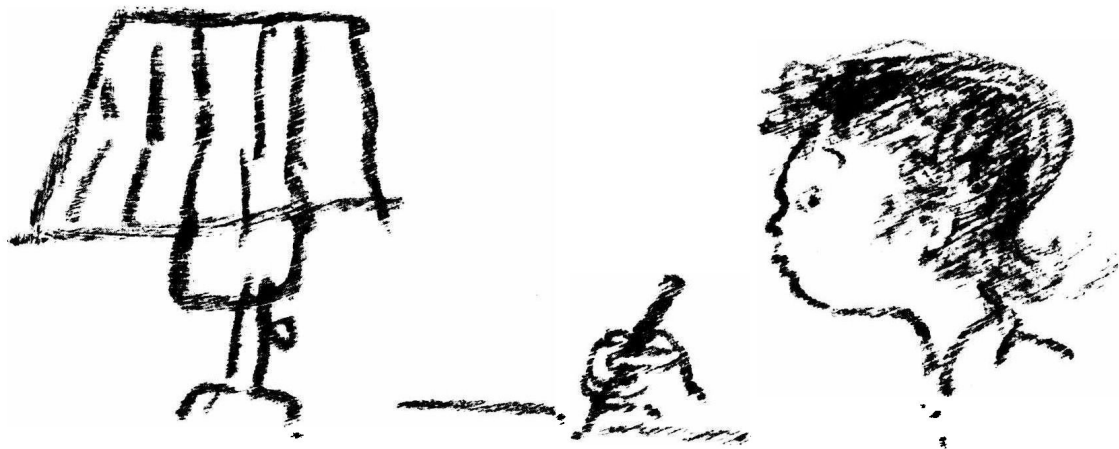
「うん、でも、ぼく……………」

おねえちゃんのようになれていっても、ぼくには、それはむりだ。

おねえちゃんは、まい日^{にっ}日記^きをかいているからな、作文^{きょうぶん}になれているんだ。日記をまい日かくなんで、ぼくには、とてもとてもむりなことだ。

これは、人にいわれちゃこまることだけれども……。ぼく、四、五日まえ、おねえちゃんの日記を見たんだ。

むずかしいかん字が　いっぱいあって、よめないところがあった。でも、どうにかよみとれた。



おねえちゃんの日記

六月十日 月よう日 天気（雨）

きょうは、おとうさんの命日です。

一年まえのきょう、おとうさんは、かいしゃの
じどうしゃを うんてんしていて、じこにあい、
なくなっていました。

おかあさんは、しごとから帰ってくると、ぶつ
だんのまえにすわり、ひとりでおきようをあげて
いました。

わたしは、おとうさんのことを思い出すと、と
てもとてもかなしくなつて、ないてしまいました。

おねえちゃんの日記をよむと、ぼくのあたまに、
二年まえの、六月十日のことが、はつきりとうか
んできた。

あの日は、あさから雨がふっていた。

夕^{ゆう}がた、けいさつから、おとうさんが こうつうじこにあつて、びょういんにいる、という電話があり、ぼくは、おねえちゃんと おかあさんの三人で、おおいそぎで びょういんにかけつけた。

おとうさんは、からだじゅうを ほうたいでぐるぐるまかれ、ベッドにねていた。

ぼくとおねえちゃんは、

「おとうさん、おとうさん……………」

と、よんだがへんじをしません。

ぼくはかなしくなつて、ないてしまった。おねえちゃんも おかあさんも ないていた。

おいしゃさんに、おかあさんが、おとうさんのようだいをきくと、

「とても大けがですからね、なんともいえません。できるだけのことはいたします。」

と、むずかしい顔をして いいのこして歩いて行つた。

そのばんおそく、おとうさんはなにもはなさずなくなった。



ぼくは、あの日のことを思い出すと、とてもかなしくなって、なみだがひとりで出てきた。

なみだをふくと、ぼくはつぎのページをめくった。

六月十一日 火曜日 天気（くもり）

器^き楽^{がく}合^{がっ}奏^{そう}の ぶんたんがきまりました。わたしと山田さんと、川本さんは、オルガンです。

夜^よ、夕^{ゆふ}ごはんのよういをしながら、おかあさんに このことを話しました。そして、

「山田さんも川本さんも、オルガンをもっているのよ。わたしにもかつて、おかあさん。」

と、たのみました。

「そつね、そのうちボーナスでももらったら。」
と、いいました。

わたしは、とてもうれしくて、とびあがってよろこびました。

ぼくは、おねえちゃんとおかあさんの　やくそくを、はじめてしった。おねえちゃんにだけ　オルガンをかってやるなんて、ずるいや。

ぼくだって、じてんしゃをかってほしいのに。じてんしゃをもっていないのは、ぼくだけなんだ。三ちゃんだって、じゅんちゃんだって、古いけどもっているんだ。

つぎのページをめくると、ぼくのことがかいてあった。あまりいいことではないんだ。

六月十二日　水よう日　天気（はれ）

ずいづいの時間、わたしは川本さんと一人で、しゃせいをしに　こうていに出ていくと、たろうたちの組は、たいいくをしていました。川本さんが、「あそびに立たされているの、たろうちゃんじゃないや」

と、わたしにいいました。



「あら、また、わるぶざけをしたのね。しょうがないわ、たろうったら。」
そういったものの、わたしは、はずかしくてははずかしくて、しかたがありませんでした。たろうは、もつとまじめにへんきようすればいいと思います。

それでわかった。このことで、おかあさんに ひどくしかられたのは、おねえちゃんが いいつけたからなんだ。

おねえちゃんって、ひきょうだな。あるとき、

（わたしはなにもしりません。）

というようなかおをして、つーん、としていたくせに。

ぼくのことを、おとうとだと思って、ばかにしているにちがいないんだ。